

自民外交の支離滅裂

「張り子のトラ」 金丸訪朝

中嶋 嶺雄 / 俵 孝太郎
(東京外国語大学教授) (政治評論家)



俵 金丸信、田辺誠両実力者を団長とする自民、社会両党代表団が一緒に朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)に行って、朝鮮労働党との共同宣言を出した。全体的な評価としてはどうお考えになる。

中嶋 非常に難しいところですけれども、北朝鮮を西側の世界の中に引き入れていくきっかけをつくったということでは、評価すべきだと思います。

というのは、これは平壤の側も気づいていないと思うのですけれども、今回の金丸、田辺訪朝団をきっかけに日本から直行便が飛んだ。もう一つは、衛星通信を使うことになった。これは、いわゆる西側のネットワークであるインテルサット(国際商業衛星通信機構)に加盟している国の衛星を北朝鮮が使うということです。あれほど東側、つまり最後まで社会主義の砦を守ろうとしていたところが、彼ら自身、気づかないうちに西側の航空通信網の中に組み入れられるということですから。そういう意味では、北朝鮮の人たちにとっては大変なことで、鎖国を脱せ



俵 中嶋の両氏

金丸プリンスは二つしかない
足して二で割る、金でケリつける
このお粗末さの責任どうとるのか

ざるを得なくなった幕末期の日本のように、開国のきっかけをつくったということでは評価していいと思うんです。

ただ、そのきっかけをああいいう形でしかつけれなかったかどうかということが問題で、確かに金丸氏たちが思い切って、政府レベルと違うやり方で窓を開いたことは評価していいと思うんですが、そのとたんに事柄は内政問題じゃなくて、外交になるわけだから、その点では大変まずいことをしてきたという気がする。第一、妙香山なんていう山奥に一人、最後には、外務省の役人や日本側の通訳も入れずに行ったのは問題です。

俵 しかも共同宣言の中には、戦後の日本の存立の評価にかかわる点も含まれているわけですね。

中嶋 特に、戦後の四十五年についてまで責任を謝罪するということになる。朝鮮戦争や南北朝鮮の分断、つまり三十八度線ができたことも、日本が責任あることになる。全く、それは事実としても違うんです。日本自身が敗戦国になり、焦土と化したわけですし、戦後、アジア

の冷戦状況の中で南北が分断された。そして北の革命戦略として朝鮮戦争が起きたことは間違いないわけですから、金丸氏はそういう点で大変なことを言ってきたかと思えます。

なぜ、いま金丸氏が突出したか
おんぼろ政権と社会党の思惑

俵 今回の金丸訪朝は、まず、北朝鮮の側に日本との関係を改善しなければならぬ、相当差し迫った状況があった。ソ連のシェワルナゼ外相から北朝鮮側が、少なくともこれから今までのような格好でソビエトは石油を供給しないといわれた。量的にも、価格的にも。特に外貨払いを通告されていますね。

それから、中国の江沢民総書記と金日成主席が会って、江沢民のほうで、あなただけのところは開放経済体制を取らなきゃだめだよと言ったという報道もある。

追い詰められた北朝鮮の側は、この機会に日本を利用しなければならぬと思っただ、それは非常によくわかるんですが、私ども国内政治を見てきた人間から見てもわからないのは、金丸氏が、なぜこ

で飛び出してきたのかということです。言うまでもなく、日本と北朝鮮との間の関係というものは、世間的には社会党だけが請け負ってきたように伝えられている側面がないでもないが、既に日中国交回復に先立つ佐藤内閣の時代から、自民党の久野忠治氏がかかり動いていた。それから後は、漁業問題とも絡み、中曽根派の谷洋一氏もかなり積極的に動いて、自民党と北朝鮮とのパイプは、久野パイプ、それが谷パイプに変わりながら二十年以上続いているわけです。

そこへ金丸氏が突然飛び出してきた。飛び出してくるについては、金丸氏のほうにも計算があり、あるいは浪花節的なものもあったのかもしれないが、今の海部内閣という、力がない、要するに担ぎ手の上に乗りかかったおんぼろミコシのような政権下で、金丸氏を使えばおもしろいという判断を北朝鮮がしたからこそ、金丸訪朝があったんでしょね。

中嶋 自民党の中で影響力があると思われる人を招くというのはあるんですよ。そういう意味では非常にギラギラし

た生ぐさい今の政権運営のバックグラウンドがありますね。そういうものを引きずりながら、外交をやってもらっては困ると思うんですけれども、老いの一徹というか、日本を取り巻くいろいろな懸案、あるいはアジアに存在する問題を、おれがそろそろ出ていかなければという意識があるんじゃないかと思うんですね。周知から利用されたということだけじゃなく。

それはどういうことかというと、この間の金丸さんの外交的な関与を三つ挙げますと、一つはこの四月、北方領土問題で二島返還論を打ち上げた。

俵 いわゆる買い取り論ね。

中嶋 日ソ関係が、ゴルバチョフ訪日もあって、いよいよ日本の政治の課題になるということもあるが、今までの日ソ関係では、私も自民党から社会党までつらねる日ソ円卓会議の日本側のメンバーですと出ていますけれども、ほとんど金丸のかの字も聞いたことがない。そこにボカッと出てきた。

それから、二つ目は、日中関係ですけ

い政策的、政治的路線の構築を考えなければならぬ。けれども、現実に社会党を仕切っているのは土井氏であり、田辺氏とは犬猿の仲の山口書記長だという状況がある。そこで、自民党のほうから一つのてこをかけてもらって、社会党の中で、いわゆる土井グループでは口出しできないようなテーマをいくつかつくってしまつて、玄人の出番をつくろうというようなこともあったんだろうと思うんですね。

海部内閣の後、仮に安倍政権か、宮沢政権ができるかすれば、少なくとも金丸氏が現在、海部内閣に対してたった一人の長老というか、開將軍みたいなして振るっている権勢というものは、維持されないに決まっている。金丸氏としては海部内閣、ぼろミコシだけれども、対ソ、対中、あるいは対朝鮮半島、うんと風呂敷広げて、自分が中心になって切り回していく体制をつくらなきゃならぬということもあったらう。

ですから、今回の朝鮮問題は、金丸氏をそのかし、北朝鮮にうまく持ちかけ

ど、これは台湾との関係もあって、たまに金丸氏は、李登輝総統の就任式にも代表として行っているんですけれど、中国と台湾とのパイプ役になろうということも九月の初めごろ北京で発言した。これは、全くナンセンスなことでは、タイミングもずれているが、そういうことをあえて言う。しかも、日中関係でも過去において金丸氏というのは全く出ていない。

俵 そこへ今度の訪朝がある。

中嶋 相手側が自民党の派閥を利用しようとした、あるいは海部政権に影響のある人をつかまなければだめだという計算をしたことも事実だけれども、こちらのほうにも、そういう国内政治を引きずって、いわば金丸・田辺連合によって政界を再編成しようなんという意識があるわけでしょう。

これからは外交問題にも強くならなければ、というので、こちらの側から飛び込んでいった可能性はある。待ってましたばかり、利用されてしまったという感じですね。

た田辺氏のかいた絵かなという感じはするわけです。利害は三者三様にびたっと一致しているんでしょうね。

中嶋 そうですね。三者三様の利害の一致が、日本の国益にかなってればいいんですが、そこが非常に問題ですね。

俵 そこが問題です。それぞれに腹に一物あって、たまたま利害が一致して、とりあえずああいうイベントが平壌において組まれた。しかし、あれは従来の野党外交とも違うし、それから政党が先行する外交は日中でもなかったとは言えないわけですが、それとも違う。これが非常に妙なわけです。

中嶋 もちろん、日本政府・外務省にもどんなきっかけでもいいから、北側が日本の政府を受け入れるならば飛び込んでいこうという姿勢はあった。問題は、それをバツと北朝鮮がのんだということですね。そこに実は北朝鮮側の対日戦略があり、国内の事情があったと思うんですね。金丸訪朝の経過を全体的に見ると、非常に北朝鮮ベースになってしまつたのは、こちらは寄り合い所帯で、しか

ポスト土井体制の社会党

閣府軍維持ねらう金丸氏

俵 衆参両院のねじれ現象というものがあつた中で、一方では世代交代論、一方では自社大連立論というのが金丸氏の持論です。ところが、若い者に任せてその仕事をさせるかといえば、そうではないんで、おれが黒幕として仕切りながらの世代交代でなければならぬ。自社大連立にしてもおれ以外にできるものがないと、思っているところがある。

それから、一方、社会党の中を考えてみると、もう土井たか子氏に対しては、社会党の中で全体に、あきれ返って、これではどうにもならぬ、飽き飽きしたという雰囲気が非常に強くなっているわけですね。これは消費税の扱いにしてもそうですし、それからイラクによるクウェート侵略に伴う国連平和協力隊その他の問題にしても、実は水面下には、あのかたくなな姿勢に対する批判がある。

そういう中で、ポスト土井ということになると、とりあえずは田辺氏しかない。だから、田辺体制という中での新し

も急に行つたわけでしょう。向こうは非常にこの問題を研究し、準備していた。

俵 それから、こつちのバースペクタブ(展望)と向こうのバースペクタブが全然違つたということはありませんね。こつちは、見通したつもりでも見通した距離は短かった。向こうはずっと先まで見ていたということがあつたんでしょうね。先というのは、時間的な経過ではなくて、交渉の発展段階の先までね。

中嶋 そういう意味では、かつての日中のときと違う。日中国交のときも、公明党の竹入義勝氏をはじめいろいろあつた。だけど、あのときは、基本的には佐藤栄作首相自身が見識を持ち、それなりの理念やポリシーがあつた。

佐藤氏が何もやらないように見せながら、実際に下地をつくっていたから、田中角栄氏は非常にうまくできた。しかしながら、具体的な交渉は政府・外務省にあのときは全面的に任せられたわけです。

だけど、今度のは、金丸氏が行くのはいいけれど、その後の謝罪と償いとか、こういう問題はおれが行つたから、あと

は政府がやってくれと任せるのが政治家のやるべき……

俵 節度なんだな。

中嶋 それを全部、いわずがなのことまで言ってきたしまった。これは一つには日本の外務省がそれほどまでに地盤が沈下しているということがありますけど、今の日本の政治そのものが非常に大きな問題を抱えていることでもある。

俵 そこへ入る前に、金丸・田辺訪朝団を受け入れることについて、北朝鮮側は一致していたんでしょうか。それとも、これも朝鮮半島ウオッチャーの議論の中に、金日成主席及びそのテクノクラートたちは、その方向であったが、長男の金正日書記及びその仲間たちは必ずしもそうではなかったという見方がある。

経済の力を認めた北朝鮮

権力継承の台湾化もくろむ

中嶋 私が五月に訪朝したとき、ちらほら金丸訪朝の話が出ており、それに対する期待は非常にあって、この問題についてはそんなに意見の違いはないという感じでした。私は、金日成大学の学長を

十五年もやり、金正日書記の恩師といわれ、党中央委員会の書記も兼ねている黄長燁氏と八時間半も、北朝鮮をめぐるほとんどのすべての問題、第18富士山丸の問題や、北朝鮮のルーマニア化の可能性までいろいろ話をしましたが、私の印象では、北朝鮮が今後、日本、さらにアメリカにわたりをつけたという気持ちは既定の方針で、ほぼ一致していると見てきました。

ということば、もうそれ以外に選択肢がないんです。ですから、徐々にこの国を開いていかざるを得ないというのは、かなりの部分、金正日書記の考え方でもあるらしい。アメリカは北朝鮮が核を持っていると疑っているが、金日成主席は金丸訪朝団に対して自分たちはそんな能力もないとあえて言いました。これは日本に対するよりも、まずアメリカに対するシグナルですね。こういうことを見ると、全体的なシナリオはほぼ一致しているとは僕は見えますがね。

俵 ポーランドやハンガリーが北朝鮮と手を切ることをあえてしてまで韓国と

そして、蒋介石総統は息子の蔣経國氏に権力を譲った。今日の北朝鮮と同じパターンでしょう。システムは自由体制と社会主義と違うが、台湾も儒教的な一種の家父長体制。台湾はやがて今の李登輝総統という民主体制に移行していった。

北朝鮮が一番恐れているのはルーマニア化ですよ。その不安を避ける一つの道は権力継承における台湾化なんです。俵 しかし、それはクッションに過ぎない。

中嶋 クッションなんです。それで、やがて少し開いていこうということになるかもしれない。若干挑発したきらいはあるんですが、私は台湾の成功をうんとPRしてきた。政治の面でも経済の面でも北朝鮮にとって台湾化という一つの道があるのではないかと。そんなことを言ったら、向こうの人、怒りだすかと思っただけ、ものすごく関心を示した。

俵 それはおもしろい。

中嶋 だから、中台関係じゃなくて、台朝関係なんて、ひょっとしたら将来出てくるかもしれない。台湾側も、李登輝

手を結んだ、そのことから去年の一連の東欧の事態というのは動いてきているわけ。そうすると、経済とか生産力、しかも消費物資に関する生産力というものが、今や国際社会の中で政治変革も生み出すようなパワーなんだということを、北朝鮮も覚悟せざるを得なくなった。将来、朝鮮半島統一のときの自分たちのスタンスを少しでも有利にするためにも、少しでもやっておかないとしたんだということばあったんでしょね。

中嶋 私は自分が平壤に行くまで気がつかなかったけど、行って、思った点が二つあるんです。一つは、後継者問題。親子で権力を継承するなんていうことは社会主義、共産主義の平等の原理からは全く考えられないが、北朝鮮を儒教国家として見るとよくわかるんです。世界で最も儒教的なのが北朝鮮です。儒教的権威主義体制ということからすると、例えば今から二十年、三十年前の台湾と同じことをやっている。そのころの台湾というのは、ある意味では反共の砦であり大変な独裁体制です。

総統は賢明ですから、徐々に貿易なんかを許し、ミッションを受け入れ始めていく。俵 経済の力というのは以前は重工業を中心とした、軍事に転化し得るような生産力だった。ところが、今はそうじゃなくて、消費に結びつく生産力というのが一番大きな政治的な意味を持つ。共産主義国家といえども、大衆社会的状況というものを免れなくなってくるから。

中嶋 それが一番、社会主義圏に不足しているところですからね。ソ連も北朝鮮も。ですから、台湾や韓国などいわゆるNIE S諸国が持っている製品が……

俵 一番魅力あるでしょうね。さて、本題というか、金丸訪朝の具体的な評価の話になりますが、あの共同宣言なるものの文言、考え方、あるいはそれを生み出していった過程を見ると、やはり北朝鮮のシナリオがあって、北朝鮮のベースで、引き回されたという図式ですね。

中嶋 まさにそうだと思います。妙香山なんてところに来てくださいといわれ、行くほうも行くほう。私も、平

壤に行ってきたえも、ある意味では、丁寧な私たちの隔離をさせられるわけです、日本の旅行者というのは。それをまた、平壤から二時間とかかるところまで行って、だれもいないところで金日成主席に相對させられてということになりますと、その雰囲気だけでも位負けしちゃうますよね。

隔離され、人文字に感激

梅定食出されてびっくり

俵 位負けと言え、これもちょっと臆道の話になりますが、第18富士山丸の問題は人質を返すのが当たり前の話で、返してもらったことをありがたがる筋合いなんかどこにもない。ところが、金丸氏ははなはだ感激したらしい。あるいは、それ以前の段階で、平壤のどこかでマスゲームがあって、人文字ができて、これにも非常に感激したらしい。

マスゲーム、人文字というのは、個人の思想や個人の行動の自由な束縛した全体主義体制でなければできない。だからこそ、ヒトラーのベルリン・オリンピックを初め、創価学会の文化何とかに

至るまで、もうあれはともかく独裁体制の産物だと思ふ。一九九〇年代になってあれにだまされる人がいるかと思つたけど、まだいたんだな。

中嶋 今おっしゃる通りに、一つは儒教的国家ですよ。もう一つは、まさに社会主義とかマルクス・レーニン主義じゃなくて全体主義なんですけど、それもいわゆるスターリン型、ヒトラー型とは違ふ。新興宗教的全体主義なんです。それから、ほんとはもう一つ、去年のアジア学生青年祭のときにできた十五万人収容のメーデー競技場というのがあるんですよ。私はメーデーのときにたまたま行ったんですけど、北朝鮮のことをもっと勉強していけば五万人のマスゲームにそんなに感激しなかったかも知れない。

俵 松定食じゃなくて梅定食にびっくりして帰ってきたわけだ。さて、もう一つ本題の前に、今、世界はイラクによるクウェート侵略、そして人質という問題でどことが先に腰を抜かすか、我慢比べみたいな状況にある。そこで、そういう中で、第18富士山丸という人質問題で日本

があれだけみつともない対応をしたということの、国際社会に与えた驚愕というものがあると思うんですがね。

中嶋 私は、五月に行ったときに、第18富士山丸の問題も聞いたでした。

私の感じでは、もう北朝鮮側もこんな小さな問題で日本との大きなパイプの交流を閉ざしては、自分たちのほうが損である、そういう認識になってきていたんです。ですから、あれはまさに野党外交ぐらいがやって点数をかせがせておけばよかったんです。それをあそこまでやってしまった。

俵 身代金が大きくなりますね。問題の共同宣言に話を移しましょう。大きなポイントには二つある。朝鮮は一つという問題と、いわゆる日帝三十六年はともかく、戦後四十五年の償いという問題。

まず、「一つの朝鮮」というのは、あくまで抽象的、観念的な民族スローガンみたいなものだ、おそらく金丸氏は受け取ったんだと思う。ところが、あれは北の統一戦略そのものに結びついていて、これから先、日本の国家としての外

交を進めていく上でも、相当やっかいな問題になってくると思うんです。

北朝鮮の戦略にまきこまれた戦略なき金丸氏

中嶋 日本は韓国との間で日韓条約によって、きちんとした国家関係もあるし、大韓民国という存在を認めている。しかも一九六五年以来は、そういう一つの既成事実ができています。そこへもってきて、日本の戦後の朝鮮半島との歩みをもう一遍覆すようなことをやってきちゃったわけです。

日韓関係をもし北側が認めれば、従来の戦略、戦術なり、ポリシーの根本的な転換ですね。だけど、私は、それは今の北朝鮮としてはまだできないし、してないと思います。というのは、今の北朝鮮にとって、一番の問題は中国が韓国を認めるかどうかです。ソ連が韓国を認めるということはわかっていてあきらめていた。ところが中国は北朝鮮の最後の頼みなんです。ここを最後の拠点に考えているわけです。

そして、中国としても、儒教的な社会

主義だけど、ほかに社会主義を堅持しているのは、もう北朝鮮ぐらいです。そうすると、中国にとっても北朝鮮というのは、そう見下すわけにもいかない。中韓国交正常化が実現してしまえばもうどうしようもないけど、実現するまでは北朝鮮としては、従来からの高麗連邦共和国という、一つの朝鮮政策を捨て切れないし、捨てるはずがないと思うんです。

そういう意味では北朝鮮なりのきちんとした外交戦略があるわけです。それを、全く戦略のない金丸氏が認めてきちゃった。

俵 これまでの日本の政策は、「大韓民国政府が朝鮮半島における唯一の合法的な政権であります。しかしながら、三十八度線以北に、あるオーソリティが存在することは、私も承知しております」、これが大平外相の答弁で、一番整理された物の考え方ですからね。

中嶋 ですから、日帝の三十六年間に ついてはともかく、その後不幸にして一九六五年の日韓条約以来、あなたの国とは国交を持つことができなかったという

点でとめておくならいいですよ。それを四十五年間、敗戦からの全部を謝ることになるわけで、こういうことをやっていけると、あちこちで謝罪しなければいけないことになる。

私は、今まで对中国位負け外交とか、教科書問題、靖国問題などで日本政府はだらしないと言ってきたけれども、今回のことに限って言うと、むしろ政府・外務省を擁護したくなるぐらい、そこを飛び越えちゃっているわけです。

45年の償いのナンセンス
韓国が要求してきたら？

俵 その四十五年の間に、日韓国交回復が成立するまでの二十年間があるわけです。この二十年というのは、まさに先ほどおっしゃったように、日本はもう敗戦で発言権がない。スターリン主義のもとで北朝鮮が朝鮮戦争を起こしたということ、もはやソビエトの軍部さえも公式に認めている歴史的事実なわけですから、北朝鮮みずからに責任がある。

それから、あとの二十五年について日本が謝罪するとするならば、日韓基本条

約を結んだことについて謝罪しないと、論理的につじつまが合わない。日韓基本条約を結んで、韓国に対して有償二億、無償三億ドルの請求権を向こうに対して認め、履行したということに対してまで謝罪することになれば、少なくとも戦後外交そのものを自ら否定することになりますね。

中嶋 日本は経済的に豊かだから、経済協力という形でしてもいいけれども、日本は西側の一員として自由な体制を取ったがゆえに、こんなに豊かになったわけですから。その日本自身の選択について、何かそれを打ち消すようなことになってしまふわけです。あの論理から言うとか、そういう意味では、大変罪が重いついとか、よけいなことまでしてくれたいという気がしますよ。

俵 これは向こう側の原案に書いてあった。それに対し、いろいろ日本側の、もちろん外務省も文句を言ったろうが、金丸氏自身の判断、個人的に妙香山での人じゃった金丸氏が責任を負わざるを得ない性質のものだと思います。

中嶋 私もそう思います。これは、金丸氏自身、そういう気持ちがあつて、あの意味では「確信犯」だと思います。

俵 「確信犯」でなかったのか、ほんやりして判こつていちゃって、あとになって確信犯に転化したのか。

中嶋 いや、ほんやりしているようなフリをしながら、しかも確信犯。というのは、今のアジア情勢や、流動する世界情勢を彼自身がきちんと読んで、その上でこの選択がいいと考えたのではなくて、ただ戦後の四十五年まで含めて、とにかく謝って……

俵 銭で済むことなら済ませればいいと。

中嶋 そういう意味での確信犯。だから、よけいに困ったことなんです。それほどまでに、北朝鮮は経済的に苦しいということですね。具体的には、対外累積債務もさることながら、とにかくソ連からほとんど石油をストップされるという状況が見えていましたからね。そういう意味では、ほんとにのどから手が出るように日本の経済援助が欲しかったんです。

俵 いらないですね。ですから、形としては自民党総裁海部俊樹の個人的な代表団ということだと思ふんです。

中嶋 だけど、世間ではそれでは通用しませんし、向こうはそういうふうには受けとめないでしょう。自民党の小沢幹事長が行くことも、やはり金丸氏の平壤からの電話一本で決まったということですね。これは自民党、つまり政権担当政党としては大変なことをやっている。

俵 政党のシステムとしても非常におかしい。こんなことが、もしまかり通るならば、自民党というのは金丸独裁政党になってしまふ。

中嶋 党内民主主義を経ないわけですから。自民党のそういう、いわば金丸氏個人と、それから海部首相とのコンビネーション、これに対してだれも正面切つて異を唱えられない。

無視された自民党の党則政府、外務省は一体何だ俵 一部の長老議員は異を唱えたようですけれども。金丸独裁者、そしてその独裁者の表の番頭が海部首相。それに對

ね。逆に言うと、そうであるだけに、何もあそこまでリップサービスする必要はなかった。

俵 これはだから、リーズナブルな金額で落ち着き得るものを、逆にこっちらふくらましちやったという話ですね。

中嶋 今、北朝鮮は七十、八十億ドル欲しいというのが本音らしいですね。それも前倒しで、すぐにでも欲しいというわけでしょう。

俵 韓国の場合には当初の五億、それから中曽根内閣の時代になって四十億ドルの融資ですね。そして、韓国はついにODA（政府開発援助）の対象国から卒業しちゃったわけです。そうすると、今度、韓国が北朝鮮の四十五年に相当するものをおれのほうにもくれよと言つたつて、出すルートは制度的、行政的にも難しい。

しなれば問題、しても問題になる台湾中嶋 また、台湾は非常に豊かでお金があまっているから、そんなことは言わないんだけど、じゃあ、台湾の二千万人

に対する償いはどうするか、という問題がある。

俵 これは起きるね、完全に起きるでしょうね。しかも、日台の間には国交がない。国交がないけれども、二千万人に対する償いは当然しなければならぬ。植民地に対する償いというものを仮にするとするならば、今度は中国が二つの中国路線だということだまっていけない。

中嶋 そうすると、金丸氏の責任は重大なんです。しかしながら、金丸氏は少なくとも自民党の総裁の親書を携えて、いわば自民党を代表して行っているわけです。

俵 しかも、壮行会には海部首相も出ている。

中嶋 私が外から見ていて非常に疑問なのは、自民党総裁の親書を携えていっているのならば、その親書の中身とか、金丸氏が向こうでやってくることにしても、少なくとも自民党の総務会などで、きちんとした論議を経てしかるべきだ。ところが、そんな手順を全く踏んでいないようです。

もそういう傾向があります。それから、今度のゴルバチョフ訪日を前にして、北方領土の二島返還についてソ連が自民党訪ソ団の安倍派、三塚博氏に漏らした、漏らさないという話も、大変重要な問題だと思っています。向こうの高官がどの程度まで言ったのかかわからないが、ほんとに日本の政治はこんなことをしていいのか。

俵 向こうの高官が、そもそものレベルかということもありますね。

中嶋 そこはまだわからない。しかも、ちょっとした席で言ったことを、何か一つきちんとした政策的なプロポーザルであるかのごとく、ある種の創作が自民党の訪ソ団の側であつたんじゃないか。これは国内政局上のあせりだと思ひます。

俵 しかも、それであればその話は聞いてなかったぞと金丸氏が言う、あわてて金丸氏のところへ釈明に行く。

中嶋 そういうことだと、これはめちゃくちゃですね。少なくとも北方領土問題や、日ソの基本的な共同宣言にかかわるような問題を、ソ連は一派閥に言うほ

どひどい国ではない。安倍氏が一生懸命日ソ関係をやっていっているのはわかるけれども、これも生ぐさい国内政治を背負っているでしょう。

俵 日本の側の責任であらなってしまうと、あなたはお考えになる。私もそうだろうと思う。ところが、日ソ関係と違っていて、日本と北朝鮮の場合には、もとも国交もない。特にラングーンでの韓国要人に対するテロ、それから大韓航空機爆破以後、接触も完全に絶たれている状況だから仕方がないと言えれば仕方がないが、まさに北朝鮮と外務省との対話というものは、全く第三国を経由しても、第三国の土地においてもいない。そういう中で金丸氏が、政治家に任せると言い、これが政治だと言う。金丸氏の言う政治とはプリンシプルが二つしかない。一つは足して二で割る、一つは金で解決をつける、これしかないわけですからね。

統一どころでないのにこの外交感覚のお粗末
中嶋 もう一つは金丸氏自身の外交感覚だと思えます。さっきの中国との話

職してもいいぐらいだ。
中嶋 西ドイツのコール首相を見てると、ほんとに雲泥の差。あれは言ってみれば、東ドイツをわずかな金で買っちゃったみたいなのです。ソ連の兵隊が引き揚げる費用まで全部持ちますということ、うまく、それを感じさせないように言うことで、全部もちっちゃったようなものです。ああいうことができる首相と、日本の今の政治家を比べるとほんとに違う。中東政策の問題を含めて根本的に、特に自民党の政治家は考え直してもらわないと困りますね。

大衆に受けそうなことだけという政治的、軍事的負担負わされる俵 もう一つ最後に私なりの所感を申せば、何でも金丸氏を責めるの、金丸氏はよくやっていると声がかつての左翼偏向マスコミと言われたところから上がってきているというのは、非常におもしろい現象だと思う。と同時に、国連平和協力隊、湾岸危機に対する日本のコミットメントという、ある意味では非常に大きな外交課題に対しては、何も言っ

に戻ると、鄧小平氏が金丸氏に会わなかったことをどう解釈するかということもあります。台北も北京も一つの中国の内政問題と考えている台湾問題で、日本人に仲介の労を取ってもらおうなんて、絶対思わない。また日本人はそんなことをすべきじゃないんです。これは彼ら自身で解決すべき問題なんです。むしろ、中国は今、いかにして国内体制を固めるか、天安門事件の後遺症、それから開放体制をどうするかということで頭がいっぱいですよ。

一方、台湾側から言うと、今、台湾は経済がこんなにいいし、中国はこれから政権自体が引っくり返るかもしれないでしょう。社会主義がみんなだめになっていくわけですから、タチマエはともかく実際にはいま統一なんて考える時期でもないし、そんなことの仲介を日本人にしたらもう一つもりもないわけですよ。

そこへ金丸氏は、いかにも仲介できるようなことを言ってお笑い話なんです。両方の仲介をする人は、もしやれる状況にあっても、それが実現するまでは

ない。これも実におもしろいと思う。
金丸という人は、さっきも議論になったように、自民党の手続きをみんな無視し、そして、開き直ってしまったらだれも文句言えない、ある種の独裁者ですよ。ところが、彼の独裁的地位というのは、今日の日本の大衆社会の中で、中国と台湾は仲よくしてくれたいという、北朝鮮だって償いをしなきゃいけない、北方領土が返ってくればいいという、手続き論とか積み重ねとか、世界の流動している状況とかいうものを無視した、素朴と言えば素朴だけれども、レベルが低いと言えばレベルが低い、何となくふんわりした国民感情の上にピタッと乗っているんだね。

今ほんとに一番力がある政治家であれば、ほかに言うべきことがある。やはり湾岸危機の問題、国連憲章と日本国憲法、あるいは日本国憲法と自衛隊法、あるいは日米安保条約——日米安保条約の前文の中には、両国、つまりアメリカと日本は、個別的自衛権並びに集団的自衛権を保持しているという原則を確認していると

絶対話さない……

俵 何も言わないのが当たり前です。

中嶋 そういう滑稽な役割を演じているわけで、そのセンスで朝鮮半島問題などに当たってらっしゃるって困るんですね。

俵 しかも朝鮮半島だけではなくて、どうやらこの動きを見ていると日ソにもおれを一枚かませろという話です。

中嶋 そういう話ですよ、今度のは。日ソは安倍氏だけにやらせないという形でしょう。

俵 自民党の手続きというものを丸きり無視する独裁者。そして、中国問題にしても朝鮮半島問題にしても、素養があったと思えない。社会主義の理論なり経済なりについて、それなりの理解があり、勉強を積まれたとは到底思えない。そういう人が、日本の外交の非常に大きな部分を、既成事実をもって動かしてしまような状況になれば、これは独裁国家ですよ。しかも、海部首相というのは、外交は政府の専権事項です、ちょっとあなた慎んでくださいなんていうことは到底言えない。ほんとは、内閣総辞

書いてあるわけね。そうすると、集団的自衛権を日本国憲法が否定しているなんて今ごろ言っているのはおかしいんで、それだったら安保論争のときに、三十年前にケリがついている。

そういう一番大きなことに金丸氏は、全く物を言わない。それは緻密な、精密な条約論であり、法律論であり、あの人の理解を超えているかもしれない。大衆レベルの人氣に合致することだけは言ってるんだ。海部氏も、金丸氏も。

外交というのははつきり言って国力の反映でもあるとともに、どっち側がうまく言いくるめてエゴを通すかの勝負ですね。そこに彼らクラスの政治家が出てくると、日本が後世にわたって、負わなくともいい負担を金銭的にも、政治的にも、軍事的にも負うことになる。この責任を一体どう取ってくれるのか、これが一番大きなポイントになるでしょうね。

中嶋 日本には政治屋は大勢いても、ステイツマンがいないことを、今日ほど痛感したことはないですね。

THIS IS

12

DECEMBER
1990

読売新聞社

誌

わが最強の国連軍構想
前防衛事務次官 西広整輝
出動する自衛隊(特集)

安保理を
敗者にするな
国会百年の大罪 岩井奉信

ゴルビーに尾をふる派閥外交
中曾根康弘
中嶋嶺雄vs依孝太郎

大嘗祭報道の思わせぶり
小林淳宏
グラン・ブルーの世代 海老坂 武